

昭和十一年一月から昭和二十六年十月まで

政治家への歩み

職分社会と同業組合

東京商科大学現一橋大学の卒業論文の序
文。昭和十一年一月二十一日執筆。上田辰之
助ゼミに学んだ影響が色濃く滲みでている

内容目次

小序	(三頁)	一九頁
本稿の構成と参考文献	(二二頁)	二八頁
第一編 トーネーの職分社会論	(二九頁)	三三六頁
(イ) 権利と職分	(三一頁)	九六頁
(ロ) 獲得社会論	(九七頁)	一五四頁

第二編 (二)(八)	職分社会論	(一五五頁)	一九〇頁
(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)	トーネーの学説の時代的意義	(二九一頁)	二三六頁
	アメリカの同業組合論	(三七七頁)	三七〇頁
	同業組合の概念規定	(二三九頁)	二四四頁
	同業組合の史的発展	(二四四頁)	二九二頁
	同業組合の組織	(二九三頁)	三〇八頁
	同業組合の内部行政	(三〇九頁)	三二八頁
	同業組合のアメリカ産業機構	(三一九頁)	三七〇頁
	上に占める地位	(三一九頁)	三七〇頁

小序

上田辰之助先生の研究室の門が私に開かれてから最初に
御指導をうけつつ読んだ書物は『トーネーの獲得社会』で

あつた。そこにはトローネーが彼の卓越せる着想と豊富なる経済史的蘊蓄を傾けて、中世紀的協同社会が如何なる必要により如何なる過程を経て崩壊せしかを明らかにし、その廢墟に芽ばえた資本主義社会がその本来の成立条件を忘却して如何に個人絶対乃至は権利本位の社会に推移して行ったかの経路を描写してゐる。彼はかくしてあらゆる障壁を踏み越え守るべき限界を無視して發展し分裂したる資本主義社会を社会職分の光に照して分析批判し其諸弊惡を暴露し併せて来るべき社会は如何なる嚮導理念を支柱として組立てらるべきかに対し示唆を与へてゐる。

分觀的機械觀と権利本位思想の所産たる自由競争も階級闘争も共に社会を混乱に陥れ、資本主義社会の類廢現象は覆ふべくもなく私共の眼前に露呈されてゐる。所謂近代精神はその往くべき処を行きつくし、今や新なる転回を余儀なくせしめられつつある。思想の対立葛藤、そこから生ずる社会の混乱紛糾は人々を駆つて不安と混沌の巷に追ひやりつつある。ここに於てこの対立を止揚せる全体、分裂を克服する統一、闘争を越えた協調が要望されるのは歴史の必然の歩みでなければならぬ。かかる客觀的情勢に圍繞されて私はトローネーを繙いたのである。そして豊富にして該博なる経済史実を駆使して織りなす彼の流麗なる行文と

辛辣なる皮肉は私を魅惑してしまつた。私は彼に刺戟されて「全体と部分との關係」を経済史的に或は社会史的に考察せんとする希望と欲求を抱き且つそれを考へるについての訓練をつけた。しかし彼の所論は、私が読了せし限りに於ては、新たに職分社会の構成を提示すると言ふべきものではなく、それと對蹠的立場に立つ権利本位の社会の諸々の弊害を歴史的に闡明し且之を暴露せんとするが如きものとうけとれたのである。従つて私は彼の所論を通じてその背景をなす協同体社会の目的は何かその身分的構成はどうか或は又それと国家との關係はどうか等については遂に學びとる事が出来なかつた。しかるに私は幸にトローネーの研究と並行して上田辰之助先生の「歐洲中世経済学説史」の講筵に侍る機会を与へられた。それは主として中世の輝ける聖者、「古代文化と基督敎精神との明快にして透徹せる折衷者」、トマス・アキィナスの政治経済学説を中心として講述されたものである。恰も其年は先生が社会職分を中心とせる聖トマスの経済学説に関する多年の御研究が結実されて東京帝国大学より経済学博士の栄位を獲得された年であり、三省堂の「人と学説叢書」の刊行に參画されて自らも「トマス・アキィナス」をものせられ、私もその一部を恵与された年でもあつた。かくて幸に私はトマスの深遠

なる思想に接する機会を他の学生の誰よりも多く与へられた。偶々私個人としても或機縁からキリスト教に親しむやうになり、それに関する各種の文献を研究してゐたので、トマスの思想は異常なる興味と言はんよりも教養上の切実なる要求として私に迫つて来たのである。かかる好条件に恵まれて上田辰之助先生のトマスに関する諸々の文献を細くにつれて、トマスの大なる体系が次第に明瞭なる姿を以つて脳裏に描かれて来た。殊にその政治経済思想の根幹をなせる社会職分の原則が、その背景をなせる協同体の目的並びに構想との関連において理解されかけたのである。そして又トマスに於ける社会の重要な屬性たる目的論的秩序、自発的義務的職分意識、其結果として顕現される協調と平和等の諸々の特長が、権利本位思想によつて分裂し、個人的利己主義によつて腐敗せる現時の社会に於いて、顧みられ憶懐される所謂「中世紀的協同体への復帰思想」の台頭せる意味もよみとる事が出来るやうになつた。かくして私が疑問としてゐたトーネーの所論の背景が、トマスを学ぶことによつて、歴史的且立体的に捕捉されるやうになつた。他面トマスの政治学説並びに経済学説の現代的意義が逆にトーネーの労作を通じて把握されるものと信ずるに至つた。

かかる研究過程に於いて、私の学問的興味は何時の間に職分思想に注がれはじめ一方上田辰之助先生の御研究のテーマにも刺戟されて組合国家其他の組合運動並びに組合統制に対しても絶えず注意を怠らないやうに心掛けるに至つた。そしてその時すでに私の卒業論文のテーマはかかる分野に之を求めようとの心構へを持つことになつてゐた。加之、卒業後の私の研究の方向をかかる方向に定めるとしても、相当の学問的結実性を齎すものであると言ふことを確信するやうになつた。何故なれば近時に於ける各国の産業統制の動向が、国家と個人との間に介在する半自治的な団体を媒体とするやうな方向をさしてゐるのみならず、又自由競争と私有財産制度とに依拠せる資本主義社会の諸々の弊悪は、必至的に組合の結成を促してゐると言ふが如く、この問題は現下に於ける重要な政治的経済的問題である。しかし私がこの方向に向けられた研究を卒業後も尚続けたいと希望し且続けるに足る価値あるものと考へるのはそれだけの理由に止るものではない。かかる研究は私をして全体と部分との關係を熟察する機縁を齎し、個人の社会に対する正しい結び付きを教へ、或は更に進んで全体の為に殉ずる精神を培養する上に与つて力あるものである。聖トマスが今日に於いても尚顧みられ尊重せらるる所以は彼

の学説が極めて秀逸であり今日に於ける問題に対する貴重なる示唆を含蓄してゐると言ふだけではなく、彼の学説乃至はそれを通じて顕現される、彼の人格の教育的価値が比類なきものである為であらうと信ずる。かくてこそ真に古典の名に値する古典たる資格があるものと考へる。

資本主義経済の次に来るべきものは組合主義の経済であると言はれたり、或は現世紀は正に組合国家の世紀だと言はれてゐるやうに、現代の世界各国は程度の差こそあれ各種の組合の結成を急いでゐる。それは資本主義独自の支配の態様たる対立と競争を止揚せるものであり、資本主義自体の発展の産物でなければならぬが、同時に又其他の非経済的要素も多分に其動きのうちに盛られてゐる。民族的の如きその一例である。かかる経済的乃至非経済的要因は、組合の結成によりて、現下の産業組織の上に大いなる変化を呼び起してゐるのである。しかるに経済学者の多くは経済的機能の側面乃至は作用的分野のみにその研究の主力を注ぎ、その組織的側面の研究を閑却せる憾みなしとは言へない。つとに上田辰之助先生はこの組織研究の不足を嘆ぜられ、私共同人にその方面の開拓を慫慂された事もあった。世人は挙つて金ブロックの動搖、アメリカ銀政策の波紋、

或はアルタルキー化の進展等々の所謂外面的事象乃至は傾向に興味を奪はれてゐるが如くにみえるが、世界史は一刻と雖も組合結成への黙々たる歩みを止めない。

私はかかる事情の下に置かれ、かかる動機に鞭うたれてこの論文を草するに至つたのである。しかるに国家試験を終へてからの十月、十一月は氣分の弛緩とテーマのとり方に煩はされて徒らに低迷を続け少しも抄らなかつた。十二月に入つて漸く倉皇として起草したのである。為に参考の範圍も狭く且その思想を十分に咀嚼するの余裕もなく、極めて粗雑にして浅薄なるものとなつてしまつて、先生の御期待に背くこと甚だ多きを省みて慚愧に堪へぬ。殊に最初の計画たりし独乙の組合形態の研究を纏めあげてここに掲載することが出来なかつた事は返す返すも遺憾である。唯向後、驚馬に鞭うちての学問的精進を以て、先生の高き学恩に報ひ奉ることを期してゐる。

昭和十一年一月二十一日

中野の寓居にて 大平正芳

本稿の構成と参考文献

本稿の第一編はトーナーの職分社会論の解説を中心としてその時代的意義を探ねることに重点を置いた。その方法

としてトナーの次の三論文の全訳を掲げてその要旨を略註として附加して置いた。

1. Rights and Functions (Acquisitive Society, p.9)
2. The Acquisitive Society (Acquisitive Society, p.23)
3. The Functional Society (Acquisitive Society, p.96)

そして次にその現代的意義を尋ねるに当っては先づ現下の思想の動向を一瞥し、それが或意味に於ける中世紀的協同体への復帰を要望せる点よりして、一応トマス・アクィナスの社会観を説明し、トマスとトナーとの関連に及び、最後に組合思想の哲学的根拠となつてゐる全体主義の論理的性格を叙述し併せて若干の批判を添加した。この部分に關する参考文献をあぐれば、

- 上田辰之助博士 トマス・アクィナス
 " 組合国家の思想と其精神的基礎
 (神戸商大新聞部刊行六甲台)
- 上田貞次郎博士 社会改造と企業
 佐藤 弘氏 経済地理学総論
 阿部源一氏 職分社会思想の史的発展
 (国民経済雑誌五十五卷六号)

小野清一郎博士 法理学的普遍主義

(中央公論昭和十一年一月号)

三木 清氏 全体主義批判

Cleavage, Henry: The Guilds of America, N.Y. 1934.

R. H. Tawney: The Acquisitive Society, London, 1923.

x x x x x

第二編はアメリカの同業組合の史的発展、其組織、内部行政組織を調べ、最後に其産業機構上に於ける地位を考察した。そしてその目的とするところは、かかる研究を通じてアメリカに於ける同業組合の性質を明らかにせんとせしことである。この研究にあつての私の態度は、職分原則に照明してアメリカの同業組合を貫く精神と基本傾向を紹介批判し、更に進んで出来得べくんばそれを媒体としてアメリカ産業社会の特性を捕捉せんと努めたことである。この見地に立脚して各章の結尾に於いて私は自分の考へを総括的に述べて置いた。

(参考文献)

第一章の同業組合の概念規定に於いては、

Foth, Joseph Henry: Trade Associations; their services to industry, N.Y. 1930.

National Industrial Conference Board: Trade Associations, their economic significance & legal status, N.Y. 1925.

第二章 同業組合の設置意義とその位置

Foth, Joseph Henry : Trade Associations: their services to industry, N.Y. 1930. (第一期及び第四期
まで)

Galloway : Industrial planning under codes, N.Y. 1934.

(第五期即ち R・A・D まで)

第三章 第四章の組織及行政については専ら次の著書に依
った。

Foth, Joseph Henry : Trade Associations ; their services to industry, N.Y. 1930.

第五章 同業組合の産業機構上における地位について

次の書物の第五節 (The Place of Trade Associations in the industrial structure;

1. The Basic Advantages of the Competitive system.
2. The Outstanding Defects of Unco-ordinated Competitive Rivalry and the Functions of Business Cooperation.
3. The Legal Status of Trade Association Activities.

4. Internal and External Safeguards Against Restrictive Arrangements.

5. The Promise of the Trade Association Movement.
National Industrial Conference Board : Trade Associations, their economic significance & legal status, N.Y. 1925.

の抄訳を掲載し若干の批判を加へた。

尚各章結尾の批判に当っては第一編の参考文献より大いなるヒントを与へられたが、殊に次の書物に負ふところが
多い。

Creange, Henry: The Guilds of America, N.Y. 1934.